



城

審判部第四部門 山本 忠博

第十九回 大阪城真田丸

～真田、御家芸の籠城戦にて再び徳川を迎え撃つ～

真田幸村は、戦国史ファンの間で絶大な人気を誇りますが、人々の思い入れによる脚色が折り重なって、その実像はかなりわかりにくいものになっています。その最たるものが彼の名前で、「幸村」なる名がどこから出てきたのかさえ今となっては分らない始末です。そこで、今回は大阪城真田丸を取り上げて、いくらか史実に近い彼の姿をご紹介します。なお、彼の名前は、ここでは史実どおりに「信繁」として書き進めることにします。

信繁の大阪入城

徳川軍を二度も上田城で撃退して武名を馳せた真田昌幸が、関ヶ原の戦いの後に、次子の信繁とともに紀州九度山に流されたのは、慶長5年(1600年)のことでした。その後、昌幸は慶長16年(1611年)に65歳で亡くなりますが、それから三年後に、徳川家康が大坂の豊臣家を討滅せんとして、大阪冬の陣が起こります。

そこで、信繁は、豊臣方の招きに応じて、嫡男の幸昌とともに慶長19年(1614年)に大阪城に入城します。時に48歳のことでした。この年齢は当時としては老人の域で、これより数年前に「歳をとって病弱になり、歯も抜けた、髭も白くなった」という内容の書状を書いていますから、これが名を上げる最後の機会であると、彼は覚悟していたと推測できます。

ただ、豊臣方は、信繁に大した期待を寄せていたわけではなく、“あの昌幸の倅”くらいにしか見ていませんでした。それまで父昌幸の指揮下でしか働いておらず、彼には実績がなかったからです。さらに、兄信之

の真田本家が徳川方にいたため、彼は常に友軍から裏切りを警戒されることになります。

真田丸の構築

大阪城に入った信繁は、城の南東に世に真田丸と呼ばれる出城を築き、唯一平地のまま城に続く南側の強化を図りました。この出城は、三日月形の防衛陣が南に突出する形で、銃眼を開けた堀と、堀を廻らせ、堀は東側以外を空堀とし、空堀の中を含めて外側に三重の柵を設けて構築されました。東西二つの郭からなり、信繁、幸昌父子、監視役の伊木遠雄と、6千の兵が詰めたといわれています。

ただし、一説に、真田丸の半分は長宗我部が受け持ち、真田だけの出城ではなかったともいいます。また、ドラマ等で真田の「六連銭」の旗がひるがえっている場面を見ますが、真田本家に気を遣ってか、信繁が六連銭の旗を使った事実はありません。

出城を構築した理由

真田丸の構築をもって、大阪城南面の弱点を見抜いた信繁の戦術眼の高さを評する向きがあります。しかし、これは少々持ち上げすぎです。そもそもこの南面は、敵の寄せ口を南の一面に集中させるための「誘い」とみるべきで、城の構造としては珍しいものではありません。そして、有事の際にその誘い側を強化して、そこで敵を迎撃することは、当時の常識的な戦術です。

信繁が出城を築いてここに陣取った理由は、この常識的な戦術の他に二つほど考えられます。一つは、目立つ

位置に陣取って名を上げるため、もう一つは、裏切りを心配する友軍から離れて好きに活動するためです。

そして、真田丸は城から半ば独立していて何時でも切り離し可能なので、豊臣方としても裏切りに対処し易いというメリットがありました。ただ、徳川方に近付く分、彼はより裏切りを疑われたといえます。

真田丸の戦い

信繁は、真田丸の南に位置する篠山に兵を配して、徳川方の攻城陣地の構築を妨害しました。真田丸の向かいに陣を構えた徳川方の前田利常は、この篠山攻略を命じられ、ある夜に先鋒を発します。しかし、その右先頭が篠山に乗り込んだときには、そこは既にもぬけの殻でした。前田の動きを予見した信繁が兵を撤収させていたわけですから、当初の目的を果たした先鋒はそれで納めるべきところ、左先頭が功を焦ったのか、或いは夜中に方向を誤ったのか、真田丸の前に無防備に出てしまいます。

信繁は、前田の先鋒を直ちに討とうとする兵達を制し、夜明けを待ってから兵にこう言わせたと伝わります。「君たち、篠山に鳥獣を探しにでも来たの、そんなに暇ならここを攻めてみない」と。

こうした口上があったかどうかはともかく、前田の先鋒は信繁の誘いに乗って空堀に飛び込んでしまいます。そこへ真田丸から銃弾を雨あられのごとく浴びせたものですから、先鋒に死傷者が続出。前田軍は第三陣まで真田丸に迫るものの、いずれも猛射を受けて進むことも退くことができず、空堀にいた者はほとんど皆殺し状態に陥ります。この惨事を聞いた前田利常は、先鋒が勝手に開戦したことを怒り、兵を直ちに篠山に撤収させることとなります。

一方、前田の先鋒が真田丸に迫るのを見た徳川方の諸隊は、夜半の内に先を争って城の南側に迫り、さらに豊臣方が火薬の爆発事故を起こしたのを、城内の内応者の合図と運悪く勘違いして攻撃を開始します。しかし、こちらも真田丸以上の猛射撃にあって進退きわまらず。

その後も、信繁が、嫡男の幸昌と伊木遠雄を出撃させて徳川方を突き崩すなど、豊臣方は終始徳川方を圧倒し、最後は弾薬の消耗を考えて攻撃を止めています。このときの徳川方の死傷者数は千単位、豊臣方は皆無だったと伝わります。

真田丸と大阪城のその後

大阪城南面で大勝した豊臣方ですが、老獪な家康の手にひっかかって講和を結び、城の堀を埋められてしまうのは有名な話です。その際、真田丸は当然破却され、堀の埋め立ての資材として使われました。

堀のなくなった大阪城に防御機能はなく、慶長20年(1615年)に起こる夏の陣では、信繁たちが野戦に出たものの最終的に力尽き、大阪城の落城、豊臣家の滅亡へと至ります。

信繁の評価と真田丸跡地の現在

大阪城での信繁の行動全般は、第一に“目立つこと”を考えていた節があり、善戦した豊臣方の良いところを全部一人で持って行ってしまった感があります。また、個々の戦闘では華々しい活躍をしていますが、夏の陣では戦術上のミスも犯しており、後世に喧伝されるような大戦略家、大戦術家であったかといわれれば疑問符も付きます。

ただ、敵を上手く誘い込んで城で叩き、機を見て討つて出るという戦術は、父昌幸の上田合戦を彷彿とさせますし、夏の陣における家康本陣への突撃の手並みを見れば、信繁が優秀な戦闘指揮官であったことは、まず間違えのない事実でしょう。

さて、真田丸のあった場所は、現在の宰相山公園、明星高校、真田山公園の辺りと考えられています。その痕跡を残すものはといえば、宰相山公園にある三光神社の「真田の抜穴」と称されるものくらいですが、この穴も、徳川方が攻城用に掘ったものである可能性があり、真田丸の痕跡は、残念ながら現在ではほぼないといえます。

